

日本における安重根への関心と評価

—— 強権的帝国主義批判とその思想的継承 —— ¹⁾

外 村 大* ²⁾

1、歴史問題と日本近代史理解

長らく続いている日韓両国間の葛藤には、周知のように歴史の問題が関係している。それはしばしば、日本人の多くが植民地支配の加害の歴史を知らないためである、と言われる。

しかし、果たして、現代日本人の多くが、まったく、そうした歴史を知らず、問題であるとも考えていないのであろうか。確かに日本が朝鮮を植民地としていたこと自体を知らないという日本人もいるらしいのだが、それはさすがに少数派であろう。日韓間の人の往来、情報の流通が増加していった20世紀末以降、日本においても植民地朝鮮の歴史が言及される機会は相当に増えた。マスコミ報道でも、学校教育で用いる教科書でもそうである。近現代史はあまり扱っていないではないか、という声もあるが、十分かどうかはともかくとしても教科書に記述はかつてに比べて増えており、記述があるがゆえに試験でも出題される。であれば、やはり、それなりに学ぶはずである。したがって、日本人の多くが朝鮮植民地支配での加害の事実まったく何も知らないでいるとは考えられない。むしろ、知ってはいるし、それが問題のある行為であると感じきながら、言及されたくない、ということなのではないかと推測できる。

では、加害の史実を直視できなくなっているのは、なぜであろうか。それについては多角的に分

析する必要があるだろう。ただ、そこには、日本人の多くが、そもそも、自国の近代史をトータルにとらえようとしないうまま、自国の没落に直面せざるを得なくなつて、自信を喪失しつつあることが関係しているのではないだろうか。

自分や自分に連なる人びとが何か過去に失敗を犯し、それについて指摘されたとしても、自らに自信を持ち優れた点があることを意識できるならば、それによって深刻な精神的ダメージをうけるということにはならない。つまりある種の余裕をもってそれを受けとめることが可能である。“アジアの中で唯一の先進国であり経済大国である”という自信を持っていた（それを自信の根拠するのがよいのかどうか、妥当かどうかはここでは問わないとして）、20世紀末までの日本国民は、そのような態度を持っていた。だが、もはや、日本国民はそのような自信を持つことはできなくなってしまった。近年、テレビ番組などで“日本はこのような優れた点を持っている”ということをかたり、無理があるような話を含めて、ずいぶん、宣伝しているのは、必死に自信の根拠を探しているからにはかならないだろう。そのなかで、過去の自分たちの問題ある行動を直視できなくなっているのである。

しかも、現代日本人のなかには、過去の侵略や植民地支配で起きた人権侵害を指摘されることについて、あたかも自分たちや自分に連なる人びとが責められているような感覚を抱く者が少なくないようである。これは、日韓両国間の葛藤がク

* 東京大学大学院総合文化研究科 教授

ローズアップされるなかで、歴史を考える時に国民対国民、民族対民族の枠組みを過剰に意識するようになっていることが影響しているのは間違いないが、そもそも、多様な歴史を知らないという問題がある。極端な見方かもしれないが、あまり近代史について関心を持っておらず、その知識もない多くの現代日本人は、隣国の人びとの侵略や植民地支配にかかわる問題の指摘を通じて、ますます自国史のイメージを貧弱なものにしてしまっているとすら言えるかもしれない。おそらく現在の日本では、侵略や植民地支配には直接に関係していない人びとの営みがあり、そこでは、民族の違いを超えた交流もあったこと、さらには軍国主義的膨張に帰結しない国家構想や政策を提示する人びともいたことはあまり語られない。また、侵略や他民族への抑圧を批判し、それを行う自国政府にも抵抗した人びとの活動についてもほとんど意識されずにいるのである。もしそれが意識されているのであれば、日本人イコール侵略者・抑圧者という単純な認識に陥ることはなく、自分たちが責められているとして反発するのではなしに、落ち着いて過去の歴史と自身との関係を考えることが可能となるはずである。

以上のことを踏まえる時、日韓間の歴史問題で重要なのは、単に個別の史実をより詳しく教えていくことではないと言えそうである。それは、日本人の日本近代史全体の解釈と日本人のアイデンティティのあり方にかかわる問題だからである。そして、アイデンティティは自分たちに連なる人びとがこれまでどのように生きてそのうちの何を重視するか、つまり自分たちが大切にすべき歴史とかかわる。したがって結局、日本近代史をどう解釈するかが、焦点化している個別の歴史問題の葛藤を解きほぐしていくために根本的に重要となる。

2、日本帝国の執権勢力とその対抗勢力

近代初期、日本において権力の中核に位置した人びとは、明治維新の中心勢力であった薩長藩閥の下級武士を中心に、一部、華族や幕府に出仕していた技術者らで主に構成されていた。時期が下

ると、その子どもや帝国大学などの官立学校や陸海軍の諸学校で要請されたエリート官僚、軍人らがそこに加わる。彼らが中心となって行われていた国家運営では、近代国家としての諸制度の整備、産業の振興、教育の普及、当時の国際秩序への参入（不平等条約の改正）といった政策とともに軍備拡張、対外膨張が進められた。侵略、支配を受けた他国から見れば、そのことは軍国主義者たる支配層と一般の国民が一体となって強権的な帝国主義の施策を取り続けたと捉えられるだろう。実際、近代日本の主流を軸に歴史を見るとなればそのような説明は間違いではない。

ただし、上記のような執権層に対抗し、それを批判する勢力、活動も常に存在した。1870年代から1880年代には豪農やジャーナリストら都市知識人を担い手とする自由民権運動があり、帝国議会開設後は、その流れを組む人びとがいわゆる民権勢力として藩閥政府に対抗した。また、20世紀初頭には社会主義思想が流入し、社会主義者の活動も始まる。これは1910年の大逆事件で窒息状態となるが、1910年代には、リベラリストの言論活動や穏健な労働組合活動が始まり、大正デモクラシーと呼ばれる状況が作り出される。また、1920年代後半以降は、弾圧の時代を潜り抜けて活動していた社会主義者や大正デモクラシーの担い手のなかから社会民主主義政党が生まれ、それは少数政党であり続けたが議会にも進出する。1930年代半ばの準戦時体制の時期にも、既存の政党のなかのリベラリストや社会民主主義政党の一部は、軍部の強権的な政治に対抗しようとしていた。

このほか、1920年代から1930年代初頭にかけては、共産主義者の活動もあった。これはもっとも根本的で非妥協的に日本帝国の支配者を批判していたが、しかし政治勢力としてはごく少数の存在であり、民衆との乖離の中で弾圧を受け崩壊していった。

ただし、こうした支配層と批判勢力は、いつの時期も完全に分離していたというわけではなく、支配層を批判する勢力が常に平和主義的で対外膨張を批判していたわけでもない。自由民権運動のなかで発足した自由党はやがて藩閥勢力のリーダーである伊藤博文をトップに据えた立憲政友会

となったし、自由民権運動の旗手の一人と目されていた大隈重信も藩閥勢力と妥協しつつ政権の座に就いている。しかも、自由民権運動家のなかにはむしろ対外硬派と目すべき運動を展開する者もいたし、大隈重信内閣は中国に対する21か条要求を出している。社会民主主義系の政治指導者のなかには、急進ファシズム運動と結びついたり、満洲侵略を支持したりする者もいたのである。

3、強権的帝国主義の批判者

しかし、日本帝国の権力者たちが進める侵略や植民地支配を批判的に見ていた人びとがいたことは確かである。では、そのような認識は何をもとに生じるのであろうか。一つには、軍備拡張を行い他国に軍隊を進めることは自身の幸福に必ずしもつながらないという判断である。これは、まず、自分や自分の家族が戦場で生命の危険にさらされることへの不安というごく当然の認識から生まれる。また、軍備拡張や戦争の必要性を説く為政者に対して、様々な情勢判断や経済合理性を考慮に入れて、自国民の福利のための政策を優先すべきであるとか、むしろ平和的な関係を維持する努力こそがとりうる選択であるという思考の結果として示されることもある。

1880年代、朝鮮に干渉しようとする自国政府の動きに対して内政を優先すべきとした自由民権運動家の議論や1920年代に示された、植民地を放棄してむしろ友好のもとに自由貿易を進めることが自国の利益になると説いた石橋湛山の主張はそのようなものである。また、自由民権運動に参画し帝国議會議員となったが、職を辞して鉱毒被害に苦しむ農民の救済に取り組んでいた田中正造は、軍備全廃をも説いていた。そして彼は、1910年8月、韓国併合を祝賀するムードに対して、亡国の語を用いて批判した。その直前に起こった水害でさらなる鉱毒被害が起こっているのに、それに目を向けようとしない、つまり自国民を大切にすることなく対外膨張を祝うことに憤ったためである³⁾。

ただし、自分たちの利益重視は当然で、軍備拡張や戦争反対の有力な根拠となるとしても、それ

は常にそうした判断を導くとは限らない。自分たちの利益となるような軍備拡張や戦争には賛成するということにもなりうるからである。実際、自由民権運動家やその流れをくむ政党人はそうした動きを示したこともある。労働者や農民の福利を重視する社会民主主義者たちの一部もまた、日本の満洲権益維持拡大が日本国内の失業者やと土地を持たない農民を救うと考えて満洲事変を支持する態度をとった。

だが、軍備拡張や戦争への批判的態度は、自分たちの利益の重視からだけではなく、他者を意識することで生まれることもある。自国民以外も同じ人間であり、自分たちと同じように人間として尊重されるべき存在と見る時、それらの人びとを痛めつけ、侵略の対象とすることの問題性は当然にして意識される。これは誰でも持ちうる感覚である。実際、そのような感覚をもとに、1910年8月、韓国併合に対して批判的に見ていた日本人がいたことも確認できる。東京市に住んでいたある日本人は、世の中の韓国併合祝賀に同調しなかった。祝意を示して国旗を掲げるよう警察に言われたが、「[韓国併合という]日本にとっての喜びは朝鮮人には悲しみに違いない」と考えてそうしなかったのである⁴⁾。1919年の三・一運動後に盛んとなる、朝鮮植民地統治への批判でも、統治される側の意識を視野に入れた議論は存在する。吉野作造は、朝鮮統治については「これを朝鮮人がどう見たかを検するのが必要である」ということの重要性を説いている⁵⁾。また、前述の田中正造は、日本の鉱毒被害者と朝鮮の人びととを重ね合わせて意識していた。1909年9月10日の書簡で、「[鉱毒の被害に苦しむ]関東人民は朝鮮国民なり。銅山は日本政府、県は統監府なり」の言葉を残しているのである⁶⁾。

ただし、リベラリストや社会民主主義者、朝鮮人の心理を思いやる市井の庶民が徹底的に日本帝国主義を批判し植民地支配をやめることを強く主張した事実はない。朝鮮統治について多くの論考を残した吉野作造も、同化政策や不平等な教育制度、強権的な憲兵警察制度の変更や廃止を提起したが、朝鮮総督府自体をなくすべきだとは言っていないのである。大正デモクラシー期に活躍した

リベラルな論客の言説も、日本帝国の秩序それ自体を否定したわけではない。それは、むき出しの暴力を用いた抑圧的な政治を行う強権的帝国主義への批判にとどまっていたことは否定できない。

とは言え、政治勢力として植民地支配を否定した政治勢力が存在しなかったわけではない。日本共産党は、反帝国主義と植民地解放闘争支持を明確にかかげていた。ただ、そこに参画する人びとがすべて植民地支配をうける民衆の具体的な苦悩を理解していたかは不明である。上からの指導で教えられた理論をただ受け入れて、民族解放闘争支持を唱えていた場合、自己の思想とはならない。自国の侵略戦争や植民地支配への批判を深めていくうえでは、侵略、支配をうける側の具体的な個々の人間の営みを思い、見据えていくということが重要である。そうした態度は、共産主義の理論から導きだされるものではない。それは、どのような人びとの人格をも尊重すべきことを重視する思想から生まれるものである。そのような態度教条主義的な共産主義者よりも、むしろ人道主義的なリベラリストやリベラリズムを受容したうえで社会主義をめざした社会民主主義者の間で見られたとも考えられる。したがって、リベラリストや社会民主主義者を単純に根本的な帝国主義批判を主張していないとして否定的にのみ見るのは問題であろう。

4、安重根への日本社会の視線

韓国との歴史問題が強く意識されている現代日本人の間では、しばしば伊藤博文と安重根について触れる際、“日本人にとって伊藤博文は明治の元勳で近代化の功労者”“安重根はその伊藤を殺したテロリスト”という単純な認識をもとにして語りがちである。2014年には、ハルビンに安重根記念館が出来ることに対して、菅義偉官房長官（当時）は、安重根は初代首相を殺害し、死刑判決を受けたテロリストだと不快感を示した。

しかし、日本人すべてが伊藤博文を肯定的に評価し、安重根を否定的に見る必要もないし、そもそも、そのような認識のみが日本人の間で一般的であったわけではない。対外膨張に批判的であっ

た人びと、それを推進していた藩閥政府のリーダーである伊藤博文についても評価しないという者は日本人のなかに当然、存在した。たとえば、社会主義者の幸徳秋水は、1910年に明治天皇暗殺の嫌疑で逮捕された際、安重根の写真の絵葉書をもっており、そこには「舎生取義／殺身成仁／安君一挙／天地皆振」と記していた。このことは安重根に関心を持つ人びとや明治社会主義を研究する者の間でよく知られる事実となっている。また、安重根の伊藤暗殺から数年後に日本国内で出されたある書籍には、「世人或は伊藤公を狙撃せる安重根李完用を狙撃せる李在明を以て志士仁人とするものあるは是れ容易ならざる誤謬なり」との文章を見つけることができる⁷⁾。「誤謬」とわざわざ指摘しているのはそのように言う人がいたためである。自分の生命を顧みず義のために政敵を殺す行為は、19世紀後半の日本では称賛されることでもあり、そうした価値観から安重根を評価する日本人は、それほど珍しくなかったことがうかがわれる。

やや時期はくだるが、民権運動家であり、帝国議会衆議院議員もつとめた講釈師の伊藤痴遊は、1931年に出した書籍の中で、伊藤博文暗殺に触れている。彼は伊藤博文について、「功罪交々」であるが「大政治家であった」と評価しているものの、同時に安重根の行為についても批判はしていない。「長い間の独立国が、俄かに他国の統治を受けるとなったら、必ず憤激の血を湧かして、種々の過激運動を起す事は、啻に朝鮮のみに限らぬ。どこの国でも、同じ事で、また左様あつて然る可きだ」と記し、朝鮮民族としての愛国の行動に理解を示したのである。

だが、伊藤博文暗殺の同時代や、1910年以降の日本帝国が朝鮮を植民地としていた時期において、日本人が安重根を公然と評価することはやはり困難であった。日本の商業紙等の報道では、日本帝国に反抗する朝鮮人は、無知蒙昧なだけの危険な存在として描かれていたのであり、安重根についても、どのような人物でいかなる思想を持っていたのかは十分に伝えられていなかった。また、戦後の日本でも、長らく特に安重根に対する関心を持つ者は少なかった。韓国は身近な国ではなかつ

たし、安重根にかかわる史料も多数発掘されていたわけではなかったからである。それが変化していったのは1980年代に入ってからであり、これ以降、史料集や安重根の伝記などが日本語で出されるようになっていた⁸⁾。

しかし、それ以前にも、安重根に関心を寄せて、彼を取り上げた文章を発表したり、言及したりしていた日本人は存在する。具体的に、以下ではそうした日本人のうち、1931年に「戯曲 安重根」を発表している長谷川海太郎（この作品の筆名としては谷譲次）と1960年代から1970年代にかけて国会で安重根に触れて日韓関係について言及していた戸叶武という人物に着目したい。そして、この2人の安重根への関心や評価のあり方、それを生み出した背景を考えることにより、強権的帝国主義の路線とは異なる思想潮流が近代日本に存在したことを確認したい。

5、長谷川海太郎と「戯曲 安重根」

長谷川海太郎は、1900年、新潟県佐渡に生まれ、函館で育った。その父である長谷川淑夫は佐渡に生まれたジャーナリストである。彼は初等教育を受けた後、自由民権思想にあこがれて東京に赴き、東京帝大で学び帰郷して佐渡中学の英語教師を勤めていたが、1902年に『北海新聞』の主筆の招きに応じて函館に移住、新聞人となった。彼の移住は、犬養毅の普通選挙論に共鳴しそれを函館でも普及させようとしたためとも言われる。そして、『北海新聞』が発行を禁止された後、活動の場を移した『函館新聞』の社主である平出喜三郎は代議士で、政党政治を確立しようとしていた憲政会に所属しており、長谷川淑夫も民本主義・普通選挙を論じていたとされる。つまり、長谷川海太郎は、自由民権運動、大正デモクラシーを広めようとする父のもとで育ったのである。

もっとも、子が父の思想をそのまま受け継ぐとは限らない。そして海太郎の政治思想についてはわかることが少ない。1917～20年頃、東京にいた頃にアナキストの大杉栄と交流を持ち、米国滞在時に労働組合の活動にも関与したとされるが、アナキズムや社会主義にどの程度の影響を受けてい

たかは不明である。ただし、淑夫も家父長主義的な抑圧とは対極的な態度の持ち主であり、淑夫と海太郎の仲は悪くなく、またよく議論をしていたようである。そうした家庭の雰囲気はリベラリズムと無縁ではない。また、長谷川淑夫は度々、筆禍で獄に下ってもいる。その父の姿を知る海太郎が、藩閥勢力を支持する姿勢をとることはあり得なかったと考えられる。

長谷川海太郎は、1920年に渡米し、24年に帰国、作家として作品を発表するようになる。その作品は人気を得て、林不忘、牧逸馬、谷譲次という三つのペンネームを用いて、活躍することとなった。活動の幅はかなり広く、アメリカでの経験をもとにした小説、剣劇小説（丹下左膳という今日もよく知られるヒーローが主人公となっている）、欧米の犯罪記録をもとにした怪奇実話、同時代の都市風俗小説、さらには様々な翻訳も手掛けた。

その彼が、谷譲次の筆名で『中央公論』1931年4月号に発表したのが、「戯曲 安重根」である。これは、1909年8月と10月、ウラジオストックからハルビンに向かった安重根を主人公とし、登場人物もほとんどが朝鮮人という作品である。終わりはパントマイムで行われ、ハルビン駅のプラットフォームに到着した伊藤ら一行のほうに安重根が向かっていく場面となっている。したがって、これは安重根の伊藤暗殺をテーマとして扱った作品であることは間違いない。

だが、この作品は朝鮮人たちの英雄的な民族運動を描いたわけではない。安と接する朝鮮人たちは必ずしも、立派な民族意識を持つ人びとではなく、日本のスパイもいるし、安の同志たちも純粋な心で彼を支援しようとはしていない。最初の場面は、ウラジオストックの朝鮮人街にやってきた安重根が大韓帝国の国権回復のために各自が努力すべきことを演説するが、しかし街の人びとはそれに関心を向けようともしないというものである。そして、作品を通じて描かれる安重根は、決然と伊藤暗殺に向けて強い意志をもって進む英雄ではない。周りの同志たちが伊藤暗殺の実行を期待していることにむしろ束縛と感じ、「おれ個人として、伊藤を殺して何の得るところがあるんだ」と思い悩む。さらには、愛人に対して「どこかへ逃

げよう。そして二人で暮らそう！」「天下だとか国家だとか、そんなことは人に任せておけばいい」と語ったりもしているのである（すぐにその語を「冗談だよ」として否定しているが）。

このように描かれた安重根は、彼を尊敬する朝鮮人・韓国人の民族主義者からはとうてい受け入れがたいものであろう。同時代における朝鮮人の間でも特に大きな反応は見られず⁹⁾、解放後もこの作品に注目した朝鮮人・韓国人はいないようである。

一方、日本人の間でもこの作品に注目し、評価した論者は少ない。ただし、同時代では、青野季吉が『東京朝日新聞』1931年4月1日、3日の「文芸時評」でこの作品について論じている。当時、プロレタリア文化運動の旗手であり、マルクス主義者であった青野は、この作品を安重根の「人間らしさ」を描く個人主義の主張としてとらえて批判する。青野の議論は要するに、帝国主義との闘いに献身的に努力をすることを忘れさせ、小市民的な自己の利益追求を肯定することにつながるので問題だ、ということである¹⁰⁾。また、戦後の長谷川海太郎に関する研究などでも、この作品への言及があり、そこでも安重根という個人が描かれていることへの注目がある。ただし、それは否定的に捉えられていない。例えば室謙二は、「アナーキストであり、実存主義者である」安重根が「絶対自由人として、自ら選び取った自由意思で伊藤博文を殺す」、そうした「安重根を描くことによって、伊藤博文による日本国家を批判しているし、自由を抑圧するすべてのものを批判している」との評価を与えた¹¹⁾。

このうち、青野の主張は、おそらく教条主義的なマルクス主義者のみにしか同意を得られないもので深く論ずる必要はなかろう。ただし、安重根を悩める人間として、また、室が着目しているように自由意思をもとに行動することを描いていることが同時代においてどのような意味をもったのかは考えておくべきである。

大韓帝国が日本帝国の保護国となり国権が奪われつつあった時期、朝鮮半島では義兵闘争などの抗日運動が展開された。そしてそれは、頑迷な暴徒による非道な活動として報じられた。安重根に

ついても、その人となりや思想が詳しく報道されたわけではない。日本人の多くは、抗日運動を行う朝鮮人たちは無知蒙昧な人びととして捉え、自身が独自の思考をもって活動をする能力を持つ者とは考えていなかった。これは1919年の三・一運動に接した際においても同様である。それは、迷信めいたことをいう天道教の指導者に騙された人びとが騒いでいるとか、欧米人の宣教師が扇動しているにすぎないととらえられた。日本の新聞ではそのように報道されていた。

このような当時において、個人として悩み、最終的に伊藤暗殺を決意する安重根や様々な思惑をもって安と接する朝鮮人たちを描くことは、特別な意味をもっていたのではないだろうか。つまり、朝鮮人はわけのわからない存在ではなく、人格を持ち自分の意思で行動する人びとであることを、多くの日本人に気付かせる作用を持ちうるものだったと考えられる。そして、これまでの研究では注目が少ないようであるが、長谷川海太郎はこの作品の中で、そのような判断能力を持つ朝鮮人たちに、日本帝国のあり方を批判させている。

また、前述のように、室は日本国家への批判、自由を抑圧するすべてのものへの批判を「戯曲 安重根」に見出しているが、この作品で長谷川海太郎は、自由を抑圧する国家の問題性を抽象的に論じているのではなく、日本帝国の取って来た具体的な政策、つまりは膨張主義、侵略の問題性を指摘している。例えば、「戯曲 安重根」の最初の場面では、ウラジオストックで安重根の演説が割合長く記されている。そこでは、次のように日本帝国が大韓帝国の皇帝とその人びとを裏切ったことも説明されているのである。

日露の媾和が成立して日本軍が凱旋することになりました時のごときは、韓国人は自国の凱旋のごとくに喜んで、いよいよこれから韓国の独立が鞏固になると言っておりましたところが、その後伊藤公爵が韓国の統監として赴任して以来、前に申しました五カ条の協約を締結しましたが、それはまったく先に宣言せられた韓国の独立を鞏固ならしむるという意に反しておりましたために、慚からず韓

国上下の感情を害して、それに対し不服を唱えておりました。のみならず、千八百九十七年[1907年の誤りか、少なくとも日露戦争後であれば、1900年代でなければおかしい]にいたりまして、またもや七カ条の協約というもの締結されましたが、これも先の五カ条と同様、韓国皇帝陛下が親ら玉璽を鈐せられたのではなく、また韓国の総理大臣が同意したものでない。じつに伊藤統監が強いて圧迫をもって締結されたのであります。

同時代の日本では、韓国の保護国化から併合に至る過程の説明は当然ながら平和的に進められたというものだった。だがここで、長谷川は、「韓国上下」が反対していたのみならず、韓国皇帝も総理大臣も同意していないとはっきり記している。しかも、韓国皇帝が自身で玉璽を押していないという話も伝えている。これは、当時の日本人の間ではほとんど知られていなかったことである。長谷川はあえてそのことを記して、日本帝国の韓国保護国化の過程の不当性を示していたのである。また、登場する安重根の同志たちは、日本帝国の膨張主義、軍国主義をしっかりとらえて批判している。すなわち、ある朝鮮人青年は「韓国を踏台にして満洲へ伸びようとする日本の野心は、誰に指摘されなくたってわかっているんだ」と語っている。また、伊藤暗殺を実行しようかどうか悩む安に対して、ウラジオストックの朝鮮語紙『大東共報』の主筆である李剛は「プリンス伊藤を斃したところで、日本のジンゴイズムはどうなるものでもない。韓国の独立という大目的のためにも、何ら貢献するところはないと思う。単なるデモとしたって、計画的に後が続かなくちゃあ、一つだけでは何の効果もないのだ」と語っている。つまり日本におけるジンゴイズム＝好戦的で膨張主義的なナショナリズムがいかに強いかが述べられているのである。

このような言葉は、戯曲中の朝鮮人の台詞として出ているものであり、長谷川の地の文章として提示されているのではない。とは言え、朝鮮半島支配と満洲での権益保持、さらには領土拡張を当然のこととして捉えていた日本人が多かったこと

を考えれば、それに対する批判があることを示すことの意義は大きい。

同時に、この作品が執筆され、発表されたのがどのような時期であったかにも注目しておく必要がある。作品が掲載された『中央公論』1931年4月号は3月に発売されていた。流行作家で多忙であった長谷川海太郎がこの作品の原稿を執筆したのはおそらく1931年の1月くらいではないだろうか。その時期は、日本帝国の満洲権益に注目が集まっていた。すでに1928年に張学良政権は中国国民党支持を鮮明にしており、日本製品のボイコットや満鉄平行線の設置などの日本帝国排斥の動きが進んでいた。こうしたなかで、立憲民政党（憲政会の後身）を与党とする若槻礼次郎内閣の幣原外相は満蒙問題解決に向けて交渉を行うとしていたが、進展はなく、これを軟弱外交として批判する声が高まっていた。1月23日の帝国議会では野党政友会の松岡洋右議員が「満蒙問題は…我が国民の生命線である」、にもかかわらず「現内閣成立以来茲に一年半、此間現内閣は満蒙で何を為さったか」「幣原外相の絶対無為傍観主義が遺憾なく徹底されてある」と厳しく批判していた¹²⁾。このようななかで、世論も幣原外交への批判する声が強まり¹³⁾、「満蒙問題」での強硬的解決の支持が次第に広がりつつあった。松岡洋右の帝国議会で発した、生命線という言葉は強い印象を日本人の間に与え（松岡がこの年7月、『動く満蒙』という書籍を出し、そこでも「満蒙」は「わが国の生命線」と記したこともあり）、“満蒙は日本の生命線”というスローガンは広く世に知られるようになる。長谷川海太郎が「戯曲 安重根」を執筆したのは、「満蒙問題」をめぐる国論が沸騰し、まさに「韓国を踏台にして満洲へ伸びようとする日本の野心」の先にある日本帝国と中国人の対立が先鋭化し、「プリンス伊藤を斃したところで、日本のジンゴイズムはどうなるものでもない」かった現実が明確になりつつあった時期と言えよう。

そのようななかで、伊藤博文を暗殺した安重根を主人公とする戯曲を書いた長谷川海太郎には、やはり、19世紀末から続く日本帝国の膨張主義、軍国主義、他民族抑圧への嫌悪の意識があったのではないだろうか。残念ながら、長谷川海太郎は、

同時代の植民地支配や戦争等について正面から論じた文章は残しておらず、1936年に急死していることもあり、その政治意識の詳細は不明である。だが、そのような推測はこれまで述べてきたことから無理ではないと考える¹⁴⁾。

6、戸叶武の安重根評価

戸叶武は、1903年生まれで1982年に死去、1953～1965年、1971～82年、日本社会党所属、栃木県選出の参議院議員として活動した。安重根について関心を持ち、国会の議論でその名前を出すことがあった。確認できるのは7回、最初の言及は1964年3月26日の参議院予算委員会第二分科会、最後は1979年5月28日の参議院外務委員会においてであった。

彼の安重根への関心は、父との関係のなかでもたらされていた。彼の父である戸叶薫雄は、栃木県野上村生まれ、東京で学んだ際、自由民権思想に共鳴して活動し、20世紀初頭には、ソウルで発刊されていた日本語新聞、大韓日報社の主筆・社長を務めた。韓国併合後、戸叶薫雄はソウルから退去、帰郷し下野新聞社社長となり、さらに1913年には衆議院議員選挙に立候補して当選するが、1917年に死去している。戸叶武は、父を田中正造の政治的後継者として認識していた。

20世紀初頭に韓国に渡り活動した日本人という、対韓侵略を下支えした者というイメージがあるが、大韓毎報社自体は、統監府と対立し、それが原因で廃刊させられている。戸叶薫雄がソウルを去った原因もそこにあったようである。また、子である戸叶武は徳富蘇峰から伝え聞いた話をもとに薫雄が韓国併合に反対していたと見ている。徳富は次のように語ったとされる。

戸叶〔薫雄〕君は、政府の大陸政策、殊に朝鮮の併合には反対だった。その理由は、日本は日露戦争の時に日本に協力してくれた朝鮮独立党の一進会の志士に朝鮮独立の達成を約束している。朝鮮を独立させて東亜連邦をつくるとの盟約違反が、ハルビン駅頭での狙撃となったのである。信義に違反することこそ

百年の禍根となるであろう、との主張であった。

…戸叶君の言った言葉が面白い。僕は日韓合併に反対だ。従って合併の功労者でないのであるから、勲章はくれるというても貰うわけにはゆかない。かかる上は、何も彼もゼニに替えて日本内地に帰り、同志を糾合して官僚軍閥の大陸政策と対決を試みなければならない、とのまことに意気旺んなるものがあつた。…伊藤公も、寺内元帥も、戸叶薫雄君の主張は筋が通っているもので、これにはほとんど手こずったとのことである。君の父が逝くなった報らせを聞いて寺内首相もその時は、天晴れな快男子の好敵手を失ったと慨嘆した。私にとっても往時を回想して感無量なものがあつた¹⁵⁾。

もっとも、戸叶薫雄が一貫して併合反対論者だったかはうたがわしい。韓国併合直前の日本の官憲史料、具体的には1909年12月21日付の大韓帝国警視総監より統監宛の「戸叶薫雄の言動」という文書によれば、戸叶は「最早今日の場合に於いては一刀両断に併合的政策を実行し根本的解決を為すを至当とす」と語っていたとされる¹⁶⁾。ただし、それより以前にソウルで開かれた日本人記者たちの演説会では、戸叶薫雄は「統監府の植民政策は根本に於て誤れり」「対韓政策の要義は日本本位にして韓国本位を加味せざるべからず然かられば極東の平和を維持する能はず」と述べていた¹⁷⁾。ここからは、「日本本位」ではありつつも、確かに徳富蘇峰の言うように、統監府の政策に反対し、韓国人の意志を一定尊重しつつ日本と連携していくべきことを意識していたらしきことはうかがえよう。また、戸叶武によれば、薫雄は安重根と接触を持っていた。1974年8月29日、参議院外務委員会で戸叶武は、「彼〔安重根〕は、朝鮮から脱出してウラジオストックに行く前に、血書の文を、当時大韓日報の社長をしておった私の父戸叶薫雄にも送っており」、その内容は「二年以内に日本の日韓合併の巨頭を倒すことができなければ自分は自殺して死ぬ」（安重根がウラジオストックに向かったのは韓国併合前であるので、この説明は

記憶の混乱か、言い間違いを含む）と記したものであったと述べている。この話を戸叶武がいつどのようにして知ったのか、実際にその書簡を見たのかなどは不明であるが、そうした話が伝えられること自体、戸叶薫雄が朝鮮の民族主義者の意志を一定程度考慮しようとしていたらしきこと、官僚軍閥の大陸政策に反対していたことを裏付けると考えられる。

そのような戸叶薫雄の子である武は、大正デモクラシーの風潮が盛んであった時期に思想形成を行っている。彼は吉野作造の民本主義に共鳴し、早稲田大学在学時には、学生運動団体である文化同盟の一員となる。その文化同盟は、1923年5月、早稲田大学への軍事教育の導入を目的とする軍事研究団の設置の反対運動を展開した。この運動は、この時期の軍国主義批判のなかで発生した活動であるとともに、藩閥政府への対抗者としての早稲田大学の「伝統」を想起させつつ展開された。軍事研究団反対の文化同盟の宣言文では「早稲田大学は…学問の独立と研究の自由のために官僚及び軍閥と戦ひたる栄光ある歴史を有する」の語が見える¹⁸⁾。また、その中心的役割を果たした戸叶は、それを自身の父の政治の先行者である田中正造の活動を引き継ぐものとしても位置付けていた。戸叶は後年、国会の議論の次のように述べている。

田中正造以来の在野の政治家は、田中正造が私の生まれた一日後に牢獄から出て叫んだ声は、野獣のような戦争はすべきではない、全世界の陸海軍を廃止しなければならないと、明治三十六〔1903〕年二月十二日、掛川在の南郷村で参議院の議長をやっていた河井〔彌八〕さんのお父さん〔河井重蔵〕の主催の政談演説会で述べております。この予言者の声を私はヨハネの声のように受けとめております。二十歳にして浅沼〔稻次郎〕とともに半殺しになった軍事教育反対の反軍国主義運動を早稲田大学の一角で起こしたのも、この田中正造の在野政治家の貫く抵抗の精神を实践したのにすぎないんです。

そして、軍事研究団反対運動をめぐる右翼学生

との衝突で、戸叶は朝鮮人留学生に助けられている。反対運動の集会では司会の戸叶が壇上に立って開会を宣言するや右翼学生に袋叩きにされた際（先の引用の「二十歳にして浅沼〔稻次郎〕とともに半殺しになった」という部分はそれを指す）、戸叶を「救出してくれたのは、『三・一万歳事件』で高校時代に朝鮮独立運動で大弾圧と投獄の経験を持つ朝鮮の留学生達であった」¹⁹⁾のである。また、これが契機となったのか、あるいはそれより先のことであったかはわからないが、戸叶は当時の朝鮮人留学生の心情を聞く機会を持っていた。これも後年の国会での発言となるが、戸叶は「あの万歳騒ぎ〔三・一独立運動〕のときに、私たちの早稲田大学における学友は、あの万歳騒ぎで中学、高等学校時代の十六、七からの少年が一年、二年の刑を受けて、後に大学へ留学してきておったのであります。私たちはその悲憤の情をつぶさに彼らから聞き、一応彼らは日本で勉強してアメリカに大部分は去っていきました」と述べている²⁰⁾。

大学卒業後、新聞記者となり、戦後、国会議員となった戸叶武は、前述のように7回ほど、安重根について触れている。それは主に、日本の対外姿勢のあり方、特に朝鮮とのかかわり、あるいは日本帝国の政治の反省について述べる文脈のなかで言及されている。彼は安重根の人物や思想についてそれほど詳しく触れているわけではないが、安が「まじめなクリスチ안의教育者」であり、それが「日本軍隊に協力することによって独立を完徹できる」と信じていたが裏切られて、伊藤博文暗殺に及んだ人物であるとの理解を示している²¹⁾。そして、安重根は、イデオロギーの左右と関係なく、朝鮮民族の間で評価され、祖国のために命を捨てた人として銅像が建てられていることを紹介している²²⁾。

これに対して、伊藤博文ら、日本帝国の執権者たちを戸叶は否定的に評価する。伊藤については、「浅学非才」で、「欽定憲法の名のもとに統帥権を侵犯することができないような軍部官僚に都合のよい帝国主義憲法をつくり上げたその本尊」²³⁾、朝鮮の独立を約束したがそれを裏切った「うそつき」で「権謀術策をやったが、日本歴史の中に汚点を残した」²⁴⁾、「韓国の志士を操って、独立をさ

してやるという名目のもとに犠牲を払わせて朝鮮を合併」した、と手厳しい。あるいは「伊藤博文や山縣や寺内や日本の軍部官僚」は「アジアのためにと言いながら信義を裏切る」政治家であるとも述べている²⁵⁾。

戸叶がこうした評価を述べるのは、もちろん、軍備拡張と膨張主義の末に破滅した、近代日本の歩みを繰り返してはならないことを訴えるためであった。戸叶は安重根に触れたうえで日本の外交、政治全般のあり方に論を移し「戸叶武は社会党の一番の右派で、穏健派といわれていますが、事、反軍国主義運動に関しては命がけです。平和憲法をあなた[佐藤栄作首相]が変えるというなら、私は命がけであなたと戦います」と述べ²⁶⁾、「有事立法を口にする前に、戦争への道を封ずるような、自分だけじゃなく相手にも封じさせるような手を次から次へと先回りして打っていくのが日本の平和外交の躍動する姿ではないでしょうか。それができないような外務省はなくしてしまった方がいいのです。それをなすことのできないような見識を持たない総理大臣はとっととやめてもらいたい」と主張した²⁷⁾。

そうした平和的関係を作り出す外交のうえで、民族の心、相手の感情の尊重を重視すべきであるという主張が、戸叶の議論ではしばしばなされており、安重根への言及はそれと関係していた。とりわけ韓国・朝鮮との関係に関連した発言では「朝鮮民族の民族的な悲願、民族的な心理、民族的な感情というのを無視して、簡単に考えて取っ組んでいくとえらいことになる」²⁸⁾、「[安重根という]長い間圧政を受けたところの韓国におけるまじめなクリスチャンが、教育者が、鬼となって伊藤博文を射殺して倒れていかなければならない心情というものをくみ取るだけのゆとりがなければ、今後の日韓関係の調整は困難です」²⁹⁾と述べていることが注目される。

そして戸叶は三・一運動からちょうど60年後の1979年3月1日、韓国軍事独裁政権の民主化運動抑圧が激化しているなかで、日本政府の外交、政治姿勢について論じた際にも安重根について触れていた。そこでは、伊藤博文らの帝国主義的侵略の歴史、安重根が伊藤暗殺に至る経緯、三・一運

動を闘った朝鮮人留学生からかつて話を聞いたことを述べ、「日本はこの朝鮮の民衆の心というものを知らないばかりに、軍部官僚に任せていたばかりに、あのような悲劇を繰り返した」との見解を示したのである³⁰⁾。相手を尊重する、その心情を含めた理解に努め、それを基礎において、他国、他民族との関係を築くべきということを戸叶は重視した。そのことを、戸叶は、日本帝国の過去の歴史のなかの強権的帝国主義への批判者、それによって抑圧を受けた安重根や三・一運動の参加者を想起しながら説いていたのである。

7、強権的帝国主義批判の意義と課題

本報告では、安重根に関心を持っていた、2人の日本人について着目し、そのバックグラウンド、執筆した文学作品や政治活動について見て来た。すでに述べたように、長谷川海太郎の作品「戯曲安重根」は、人間として悩む安重根を描き、抗日運動家の朝鮮人を無知蒙昧な暴徒ではないことに気付かせた。同時に、日本の膨張主義、日本人の好戦的愛国主義への批判を朝鮮人の台詞を通じて語らせていた。それは、自由民権の影響を受け、大正デモクラシーの時代に権力者と対抗しつつ言論活動を行っていた父親のもとで育ったことと無縁でないと推測できる。

一方、戸叶武は、産業優先政策の下で苦しむ民衆を救済しようとし軍備全廃を説いた田中正造に影響を受け、その後継者であり軍閥による韓国併合に批判的であったとされる父の戸叶薫雄の跡を継ぎ、政治家として活動した。そして、国会では、日本帝国の執権者たちを批判し、平和主義の堅持を説いた。その際には、安重根や三・一独立運動に言及しながら、朝鮮民族の心情を理解すべきことを述べていた。

この2人は、おそらく、生前、まったく接点をもたなかった。ただし、彼らは、日本帝国の執権者たちと対抗し、自由民権運動の影響を受けた父のもとに育ち、大正デモクラシー状況のなかで、リベラリズムに触れ、強権帝国主義を批判した点で共通している。そして、長谷川海太郎は総力戦突入直前に急死するが、戦後、政治家として活躍

した戸叶武は、自由民権運動から大正デモクラシーのなかに確認できるリベラリズムと他者の尊重、平和主義の継承を意識していた。

こうした思想を持っていた人びとは、同時代の日本人のなかで例外的でごく少数だと見なすべきだろうか。自由民権運動や大正デモクラシーの一定の広がりを考えれば、そうとは考えられないであろう。またそうであるとすれば、安重根を単純に危険で許すべからざるテロリストとは見ず、強権的帝国主義に対して批判的に見ていた日本人は、ほかにもいたと推測される。

もちろん、そうであるからといって、日本帝国の侵略や植民地支配が免罪されるわけではない。そして、現代日本人にとって、それによって様々な被害を受けた人びとがいることを忘れず、そうした歴史を反省することは必要であり、重要である。同時に、日本帝国において執権勢力と対抗した人びとの多くが、軍備拡張や戦争、植民地支配に徹底的に反対することはなく、せいぜい、強権的帝国主義批判＝あまりにも露骨で抑圧的な政策は修正すべき、という程度の批判にとどまったことの不十分性も認識する必要がある。付言すれば、大正デモクラシー期に、軍国主義を批判し、植民地統治の改善を語っていた者であっても、その後、国策に積極的に協力するケースは特に珍しくはない。

しかし、過去の日本帝国において人びとの政治意識や行動を多角的に捉え、執権勢力とは異なる道を模索しようとしていた人びと、具体的には、自由民権運動と大正デモクラシーの担い手、20世紀初頭の社会主義者、戦間期のリベラリストや社会民主主義者に注目することはやはり重要である。彼らの指導や行動の限界、つまり、それがなぜ、徹底した帝国主義批判へ深化せず逆に変質していった場合があるのか、そもそもどうして広がりを持たなかったか、変質していったかを考えなければ、平和主義的な関係も他民族の尊重も実現しないからである。

同時に、そこにおける良質な要素、その思想的継承の試みを見出していくことが、アジアの他民族に対する優位を核とする日本人のアイデンティティの変化を促すのではないだろうか。当然なが

ら、そのことは、日韓関係の改善に資するはずである。

注

- 1) 本論文は、「第7回日韓国際学術会議シンポジウム—韓国ソウル安重根義士記念館と龍谷大学安重根東洋平和研究センターをむすんで—」〈テーマ〉安重根（アンチュンゲン）と北東アジアを取り巻く国際関係（2020年11月20日）で、発表されたものである。
〈主催〉 安重根義士記念館（韓国）・龍谷大学安重根東洋平和研究センター（日本）
〈協力〉 龍谷大学図書館・駐大阪大韓民国総領事館・在日本大韓国民団大阪府地方本部・コリア NGO センター
〈場所〉 安重根義士記念館講堂（ソウル会場）・龍谷大学深草キャンパス22号館101号室（京都会場）or ZOOM 配信
- 2) 早稲田大学第一文学部卒業・早稲田大学大学院修了、博士（文学）。日本現代史を専攻し、近年はプロレタリア演劇運動での日本人と朝鮮人の交流を研究。『朝鮮人強制連行』（岩波新書）・『朝鮮民族にとっての一九三八年・新協劇団「春香伝」』（『在日朝鮮人史研究』第48号）。
- 3) 田中正造より逸見斧吉ほか宛書簡、1910年8月31日（由井正臣・小松裕編『田中正造文集』岩波書店、2005年）。
- 4) 尹致昊の日記1939年10月16日付において、その話の記述が見える。これを語ったのは、東京で学んでいた彼の子どもに親切にしてくれた日本人女性である（尹致昊『尹致昊日記 11』大韓民国文教部国史編纂委員会、1989年）。
- 5) 吉野作造「対外的良心の發揮」『中央公論』1919年4月号。
- 6) 田中正造より逸見斧吉夫妻宛書簡、1909年9月10日（由井正臣・小松裕編『田中正造文集』岩波書店、2005年）。
- 7) 三浦了覚『禪と武士道』1915年、47頁。
- 8) 『朝日新聞』1983年4月8日夕刊「安重根復権へ日本で動き」では、史料の発掘や韓国の追悼式への日本人の参加などのことが紹介されている。また、1984年には中野泰雄『安重根 日韓関係の原像』が亜紀書房から出版されている。
- 9) ただし、この作品が日本で発表された直後に、それを朝鮮語に訳してあたかも創作のように装って出版しようとしていた動きがあったことが確認できる（『東亜日報』1931年5月15日、徐成甫「翻訳を創作然」）。
- 10) 青野の主張が端的に表れているのは次のような文章である。すなわち「もし『おれの利益』を考へることが『人間らしさ』の名においてあらゆる物がゆるされるのなら、この世の階級的正義や集団に殉ずる犠牲など人間らしからぬものと頭から否定されな

- ければならない。人間らしさからくる階級的裏切り、人間らしさからくる帝国主義への奉仕——一切はぞう悪的でなくなる。しかも、これらの破廉恥が憎悪的でなくなった世界では千万の被抑圧大衆は永遠に人間らしからぬ人生を強ひられなければならないだらう」（『東京朝日新聞』1931年4月3日付、青野季吉「文芸時評2 『おれの利益』とは何か」）。
- 11) 室謙二『踊る地平線 めりけんじゃぶ長谷川海太郎伝』晶文社、1985年、273頁。
- 12) 『官報』（号外、第59回帝国議会議事速記録第4号）、1931年1月24日。
- 13) 例えば、『東京朝日新聞』1931年1月24日付社説は「誤れる対支認識」というもので、幣原外相の外交演説を批判する主張となっている。
- 14) なお、余談であるが、長谷川海太郎の弟である長谷川四郎は、やはり作家となり、1970年代には金芝河救援運動にも参加した。1976年に金芝河の作品である「金冠のイエス」が舞台化された際には、その演出も行っている（『朝日新聞』1976年10月13日夕刊「金芝河氏の権力風刺劇」）。
- 15) 戸叶武『政治は足跡をもって描く芸術である』戸叶武遺稿集刊行会、1988年、38～39頁。
- 16) 戸叶薫雄が日本に戻ってのちに記した、『朝鮮最近世史 附・韓国併合誌』蓬山堂、1912年、でも特に統監政治や韓国併合への批判的記述は見当たらず、安重根の伊藤暗殺についても「謬れる排日思想を抱懐し敢て此蛮行を謀りしもの」と記している。もっとも、当時、韓国併合を否定し、安重根を評価することは、直ちに弾圧の対象となったであろうから、そうした記述が彼の本意に基くかは不明である。
- 17) 1908年4月23日付、警視総監丸山重俊より外務部長鍋島桂次郎宛「政談演説会の状況の件」。
- 18) 『早稲田大学百年史』ウェブ版。<https://chronicle100.waseda.jp/index.php?%E7%AC%AC%E4%B8%89%E5%B7%BB/%E7%AC%AC%E5%85%AD%E7%B7%A8%E3%80%80%E7%AC%AC%E5%8D%81%E4%BA%8C%E7%AB%A0>
- 19) 戸叶武『政治は足跡をもって描く芸術である』戸叶武遺稿集刊行会、1988年、81頁。
- 20) 『第87回国会 参議院外務委員会会議録』第6号、1979年3月1日。
- 21) 『参議院 外務委員会（第73回国会閉会後）会議録』第2号、1974年8月29日。
- 22) 『参議院 外務委員会（第73回国会閉会後）会議録』第2号、1974年8月29日。ただし、戸叶はソウルのほかの平壤にも安重根の銅像があると言っているが、これは誤解であろう。
- 23) 『参議院 外務委員会（第73回国会閉会後）会議録』第2号、1974年8月29日。
- 24) 『第87回国会 参議院外務委員会会議録』第13号、1979年5月28日。
- 25) 『第87回国会 参議院外務委員会会議録』第6号、1979年3月1日。
- 26) 『第66回国会 参議院予算委員会会議録』第1号、1971年7月22日。
- 27) 『第85回国会 参議院外務委員会会議録』第3号、1978年10月16日。
- 28) 『第46回国会 参議院予算委員会第二分科会会議録』第2号、1964年3月26日。
- 29) 『参議院 外務委員会（第73回国会閉会後）会議録』第2号、1974年8月29日。
- 30) 『第87回国会 参議院外務委員会会議録』第6号、1979年3月1日。